

アルゼンチン・タンゴこそが本物の”ワールドミュージック”

バンドネオン奏者 小松亮太さんインタビュー

タンゴギタリストの父、タンゴピアニストの母を持ち、「バンドネオンはまさに運命的存在。」と語るバンドネオン奏者 小松亮太さん。八王子公演を前にたっぷりとお話を伺いました。

1930年代ドイツ製の
バンドネオンを持つ
小松亮太さん



— バンドネオンの魅力とその希少性について教えてください。

バンドネオンは非常に珍しい楽器で、タンゴ愛好者にとっては憧れの対象です。特にアルゼンチンの80〜90歳世代の奏者たちは、その技術の高さで知られていましたが、現在その技術や教育はほぼ失われつつあります。バンドネオンは豊かな音の雰囲気とミステリアスな魅力を持ちますが、その希少性ゆえに、少し演奏ができれば「プロ」と名乗ってしまう人が増えているのが現状です。実際には、深い技術と知識が必要で、表面的な演奏だけではその本質には届かないのです。今後は、真にバンドネオンの技術を磨く奏者が育ち、その魅力が広まっていくことを願っています。

— バンドネオン奏者として、タンゴ音楽の面白さや魅力は何だと思いますか？

タンゴは非常に知的な音楽です。これまで「情熱の」「哀愁の」といった表現で多く宣伝され、そのようなイメージが先行してしまっています。ですが、実際にはそのような形容詞ではとても表せない奥深い音楽です。タンゴは、クラシック、ジャズ、ブラジル音楽、などの多様な音楽ジャンルと、さまざまな国の音楽が融合した、いわば本物の「ワールドミュージック」。特に興味深いのは、ブエノスアイレスで自然発生的に生まれた音楽が、クラシックの奏者やジャズミュージシャンによって洗練されたこと。またイタリア人、スペイン人、ドイツ人など移民の感覚が混ざり合ったことで、非常にユニークな音楽として形成されました。

現在、バンドネオン奏者が4人揃い、他の楽器と共に演奏するオルケスタ・ティピカは非常に希少です。この大規模な編成を維持するのは難しいですが、私たちは真のタンゴを体現する数少ない存在です。タンゴには6つのリズムパターンがあり、それぞれのアレンジメントには独自の魅力があります。ピアノ、コントラバス、バイオリンの演奏スタイルはクラシックやジャズとは異なるものの、共通点もあります。また、タンゴのベースラインはイタリア・バロック時代の通奏低音の考え方も見られます。このように音楽的な深みを垣間見ることができすよ。

— 八王子公演に向けての意気込みをお聞かせください。

現在、本場アルゼンチンのタンゴ界は元気がなく、若手奏者の育成も進んでいません。だからこそ私たちは、本場の演奏を超えるウォリテイで、タンゴの真髄をお届けしたいと思っています。音楽を真剣に追求した演奏を楽しんでいただけると断言できます。また、ゲストの

オルケスタ・ティピカとは...

バンドネオン3〜4人、バイオリン3人以上、ピアノ、コントラバスというアルゼンチンタンゴの黄金期を象徴する楽器編成のこと。現在では本場でも目にするのは少なくなり、小松亮太さんはこのオルケスタ・ティピカ復興に取り組む数少ないバンドネオン奏者です。

バンドネオンとは...

ボタン式のアコーディオンもありますが、バンドネオンとは全くの別物です。形状で見ると、縦長がアコーディオン、正方形がバンドネオンです。アコーディオンはお洒落な音特徴ですが、バンドネオンは感情を直接的に表現できるのが魅力です。



公演の詳細は
8ページをご覧ください！

彩吹真央さんの歌声がタンゴと融合し、さらなる魅力を引き出せるように、今から準備を進めています。真のタンゴを体感できるのはこの公演だけです。ぜひ、その魅力をご堪能ください。